

## 時の流れの中の人間

—二十年をへだてて見た

米 国、人・文化・教育—(1)

津 守 真

視野をひろげてくれた。

実際のところ、私は親しくしていた友人たちの顔を、この目で見るまで、何か大きな変化があるのではないかということが心配であった。かつては、二晩三日間、荒野の中を汽車で走り通した土地を、いまは飛行機で三時間で飛んでしまう。ワイオミングからミネソタに近づき、ミズーリ河が二又に分れるあたりになると、一面雪で蔽われた原野である。雪に蔽われた美しい市、ミネアポリスが近づいていることを感じたとき、知っている人たちがひとりひとりの顔を思い浮かべ、私の心は何ともいえず不安の中にあった。だが、飛行機がとまって、送迎口に数人の親しい友人の顔が笑いかけてとびこんできた瞬間に、時間ではもはや何の重要さももたなくなってしまった。そのころ互いに理解しあっていた人たちは、直ちに、昨日別れたかのように迎えてくれたのである。

二十年という歳月は、その間にはさまったできごとをひとつずつ思い起こすと、大へんに長い間のように感ずる。しかし、二十年前によく知っていた人と再び顔を合わせて見るときには、二十年の歳月は一瞬にしてとび去り、昨日わかれたばかりのような気さえするものである。私は、昨年十二月に、二十年ぶりに米国の土を踏んだ。今回はサンフランシスコの郊外にあるスタンフォード大学で開かれた、幼児の発達と教育に関する会議に出席することが主目的であった。その会議の後、学会の用務のため、ミネソタとペンシルヴァニアに一週間の旅をした。

ミネソタ大学はかつてその児童研究所で学んだところであり、二年間住んでいたところでもあって、二十年間、一度も会ったことのない友人が多勢いる土地である。専門の会議は、非常に緊張もしたし、それなりに収獲もあったが、この一週間の旅は、忙しい中にも、久しぶりで親しい友人に会うことができ、私の

長い年月を経たことをまざまざと知ったのは、子どももの成長にふれたときであった。\* 私が泊っていた家の女の子、メアリーは、そのころ三歳で、私がよくベッドにつれていってねかしたつた子どもである。一昨年結婚して、両親の家から遠くないところに住んでいる。一晩、一緒に夕食をしたときに、そのころ眠るときに離さなかった毛布はどうしたかとたずねると、それはもう卒業したけれど、ずいぶん長い間手離さなかったと笑

っていた。

その兄のリチャードは、そのころ幼稚園にいらっていた。テレビを買ってもらえなくて、いつもテレビのアンテナで遊んでいた。彼はいまラジオの放送局の技師兼アナウンサーとして勤めている。両親の家にはあいた部屋があるのにひとりアパート住いをしていて。私が夕食に来ることを知っているのにあらわれないので、両親は電話をかけたが、経路上、そのような時に電話をかけるのは彼の独立心に障ることを知っているのので、電話をかけるのを控えている。夜おそくアパートにたずねた婦人には、母親は洗濯物とコーラのあきびんを一山自動車に積んで帰る。自立したいが、親の助けを必要としているある時期の青年の姿である。

私のためのレセプションの席にブルージーンの仕事着のままあらわれた青年チャックは、私が泊っていた別の家の男の子で、そのころ幼稚園に通っていた。彼は、いまミネアポリス市の公園の指導員をしている好青年である。帰り際に時間を無理してこの公園に立ち寄ったときには、彼はナースリースクールの年齢の子どもたち十数人におやつを食べさせているところであった。私はかつて一緒に遊んだ子どもが、いま子どもたちの世話をする実務家になっているのを見て大へんにうれしかった。

今回の米国の旅では、私は文化の差異を強く感じたので、今後差異を強調して教育問題を書くことがあるかと思う。しかし、その前に、人間としての共通点について、個人的体験を記しておかねばならないと思い、こんなことから書き始めた次第である。

\* 昭和二十七年、八年の幼児の教育に、私が倉橋惣三先生に送った手紙を掲載してくださったものがいくつかある。その中にふれている子どもたちのこと。

## 幼児の教育 第七十一巻 第四号

四月号 定価一〇〇円

昭和四十七年三月二十五日印刷  
昭和四十七年四月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村二ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

110 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎ 本誌御購読についての御注文は発売所  
フレーベル館にお願いいたします